

終止形に接続する「なり」の意味用法

——上代と中古との相違について——

三宅 清

一 はじめに

筆者は前稿¹⁾において、終止形に接続する「なり」（以下「終止なり」）を未定、既定という概念から分析した。未定とは、「らむ」を例にとると、

1 瘦せ給へる事、いとほしげにさらぼひて、肩の程などは、痛げなるまで、衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから（源氏物語・末摘花二二〇・一四）

用例1は源氏の心中で、自分（源氏）は、どうして末摘花の見なくともいいところまで見てしまったのだろうと思っている場面である。傍線部「らむ」に上接する点線部「残りなう見あらはしつ」は源氏自身の行為なので、思っている源氏にとっては、その時点で既に起こっている（行われている）事態ということになる。このように、思っている、話している人物にとつて、思っていたり、話している時点で既に起こっている（行われている）ことが明確な事態が「既定」の事態

である。それに対し、二重傍線部の「何に」という原因・理由を表す部分は、思っている源氏にとつて、その時点では内容が不明確な「未定」の事態と言える。このような未定、既定と類似した観点から、推量（いわゆる推定も含む）の助動詞を分析する試みは夙に塚原鉄雄（二九五七）において行われている²⁾。

前稿では、その観点から中古（源氏物語）の終止なりを分析し、源氏の終止なりは未定の事態を対象とするという結論を得た。また、その際に上代（万葉集）の若干の用例も検討し、既定的な事態を対象とする例が見られるという指摘をし、上代から中古へと、既定的→未定という移行があったのではないかとの推測を述べた。上代の終止なりと中古の終止なりとが異なる様相を呈していることについては既に指摘がある³⁾。

本稿では、前稿の結果を踏まえながら、前稿では少ししか触れられなかった万葉の用例を詳細に検討し、その実態を把握するとともに、源氏との相違について、考察を加えてみたいと思う。なお、前稿でも

断つたが、源氏の終止なりは、接続の点から断定の「なり」と区別のつかない例もあるので、便宜的に、勉強社刊の『源氏物語語彙用例総索引』の分類に従った。また、「ななり」「ざなり」「べかなり」など、終止なりとラ変型活用語との複合形式は本稿でも考察対象から除いた。

二 終止なりの比較 —— 万葉と源氏 ——

二―一 源氏の終止なり

源氏の終止なりは、前稿で詳しく触れたので、ここでは簡単に結論を述べるに止める。

源氏の終止なりは大きく二類に分けられる。①「音や声などから判断した事態」②「人から聞いた事態」である。

2 今夜は、まだ更けぬに出で給ふなり。御先の声の遠くなるままに、海士も釣りすばかりになるも、我ながら憎き心かなと思ふ思ふ聞き臥し給へり。(宿木一七二八・一四)

用例2は中君の心中である。それは「思ふ思ふ聞き臥し」から分かる。傍線部の終止なりに上接する「出で給ふ」は句宮の動作だが、中君は「聞き臥し」ている状態で、点線部の「御先の声の遠くなる」(先払いの「声」が遠くなる)ことから判断している。これが①「音や声などから判断した事態」の例である。換言すれば、「出で給ふ」が終止なりの「判断の対象となる事態」、「御先の声の遠くなる」がその判断の「根拠となる事態」ということになる。

3 国の内は、守のゆかりのみこそはかしこき事にすめれど、ひがめ

る心は、さらにさも思はで、年月を経けるに、この君かくておはす¹と聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそおほやけの御かしこまりにて、須磨の浦にものし給ふなれ。

(須磨四三〇・一)

用例3は、話し手の明石の入道が、源氏が須磨にいることを、人から「この君かくておはす」と聞いて、そのことを母君に話している。したがって、終止なりに上接する「・・・須磨の浦にものし給ふ」という事態は、人から聞いた事態である。これが②「人から聞いた事態」の例である。この場合は、「・・・須磨の浦にものし給ふ」が終止なりの「判断の対象となる事態」、人から聞いた事態がその判断の「根拠となる事態」となる。

①、②とも、終止なりに上接する事態は、話し手や思っている人物にとつて、話している、あるいは思っている時点では、起こっているかないか分からない未定の事態と言える。また、源氏の終止なりは、上述のように「判断の対象となる事態」と「根拠となる事態」(想定される場合も含めて)の二つの事態を有している。

二―二 万葉の終止なり

万葉の終止なりは、正宗敦夫編の「万葉集総索引」(平凡社)では57例を数える。既定的と前述したのは、次のような場合である。

4 子があらば二人聞かむを沖つ²渚に鳴くなる鶴の暁の声(一〇〇〇) 5 わが屋戸に鳴きし雁がね雲の上に今夜鳴くなり国へかも行く(二

一三〇)

6 雁来れば萩は散りぬとき男鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり(二

一四四)

7 皆人を寝よとの鐘は打つなれど、君をし思へば寝ねかてぬかも

(六〇七)

8 秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ(一五

五〇)

用例4、5、6、8の終止なりは、いずれも「鳴く」に下接しているが、各々の作者がその「鳴く」声を実際に聞いていることは、歌の内容から明らかである。また、用例7の終止なりに上接している(鐘を)「打つ」も、その音が作者には聞こえていることが分かる。その意味で、作者にとって、「なり」に上接している事態は、既定の事態と言える。しかしながら、例えば、用例6のさ男鹿が「雁来れば萩は散りぬ」と言っていることは、あくまで作者の想像である。想像という点、前述の未定の事態と結びつけられそうだが、前述の源氏の例について述べた未定の事態とは性質を異にする。源氏の用例2の「出で給ふ」という事態は、中君が思っている時点では、思っている中君には起こっているかいないか分からない事態だが、起こりうる事態である。それに対して、「雁来れば萩は散りぬ」は作者の想像(作者にはそう聞こえる)であり、雁が人が話すように、ある特定の内容に伴って鳴くなどということは起こりえないことである。用例8の「呼び立てて」(呼び誘っているかのように)鳴くということも、用例7の

「寝よ」(そこにいる人皆に)「寝ろ」と言って鐘を打つ音が聞こえるということも作者の想像、動物や物を擬人化しているにすぎない。すなわち、挙例した万葉の終止なりに上接する事態には、厳密には未定の事態は含まれていないということである。万葉において、「鳴く」「鐘を」打つ」など、声や音と直接関連する語が終止なりに上接している例には、同じことが言える。ただ、用例4、5も波線部「沖つ」「雲の上」とあるように、音源(4は「鶴」5は「雁がね」)が作者から離れた所に存在し、鳴く声は聞こえているものの、それが本当に「鶴」や「雁がね」だとは言えないのではないかとというレベル(例えば4では「鳴いている」は既定だが、「鶴が鳴いている」は未定ということ)では未定の要素を含んでいると言えよう。前稿で「既定的」と述べた所以である。いずれにしても、以上のような既定の事態を対象とするということは、前述の源氏の終止なりには見られなかった特徴である。

三 源氏と万葉の比較

三一 構文上の比較

構文上の比較を次に示す。ここでは、構文を、比較しやすくするため、終止法、連体法、接続法の三つに単純化する。終止法には終止形による終止法の他、係り結びによる終止法、いわゆる連体止めも含める。連体法には、準体法も含める。接続法は、終止なりが「ば」「ど」「て」の接続助詞を下接している場合である。

源氏 (145例)	終止法	69例 (47・6%)
	連体法	56例 (38・6%)
	接続法	20例 (13・8%)
万葉 (57例)	終止法	36例 (63・2%)
	連体法	19例 (33・3%)
	接続法	2例 (3・5%)

右の結果から、特に指摘する点があるとすれば、万葉の終止法の多さと、源氏の接続法の多さである。しかしながら、終止法が多いからといって、それがただちに万葉の終止なりが源氏の終止なりよりモダリティ度が高いとは言えまい。なぜなら、前掲の万葉の例からも分かるように、万葉の終止なりは、「聞こえてゐる」「音がする」というような、いわば客観的事実を述べている例が圧倒的に多い。次に挙げるような、終止なりが「らし」の根拠となつてゐる例（全9例）の存在もそのことの証左になる。

9 ぬばたまの夜は明けぬらし多麻の浦に求食する鶴鳴き渡るなり
（三五九八）

用例9は、一般的に言われている「らし」の意味用法を考えると、終止なりに上接する「多麻の浦に求食する鶴鳴き渡る」という事態を根拠として、「らし」に上接する「ぬばたまの夜は明けぬ」という事態を推定していることになる。その場合、終止なりに上接している事態は、推定という確実性に乏しい判断の根拠になるので、確実性の高い、

客観的事実である蓋然性が高い。

10 里人の吾に告ぐらく・・少女らは思ひ乱れて君待つとらら恋ひ
すなり（三九七三）

用例10は、終止なりに上接している語「うら恋ひす」自体は、直接音とは関連しない。その前の「里人の吾に告ぐらく」から分かるように、作者（吾）は里人（他人）から聞いた話から終止なりに上接している事態について判断している。前述の源氏の終止なりの②の意味用法と同様の例であるが、このような例は万葉では少ない。

モダリティという観点からは、むしろ、源氏の終止なりの方が、前述のように、未定の事態に対する判断、すなわち推量（推定）の意味用法と言え、その度合いは高いと言える。源氏の接続法の多さは、終止なりがそこで切れず、さらに続いていくということ、それを可能にするのは文脈の豊かさ（量的な豊富さ）である。すなわち、源氏が散文であり、万葉が韻文であることと関連づけて説明できよう。

三―二 語彙上の比較

次に、終止なりに上接する語彙を掲げる（自立語のみを掲出。（）内の数値は用例数。数値のないものは各1例を示す。以下同じ。）。

源氏

言ふ (15) す (12) ものす (11) 宣ふ (6) 出づ (4)
おはします (4) おはす (4) 申す (4) もてなす (4)
聞こゆ (3) あくがる (2) 起く (2) 思し宣ふ (2)

つかふ(2) 悩む(2) 見はつ(2) めづ(2) 居る
 (2) 明く 挑む 往ぬ 言ひ貶す 言ひ消つ 言ひなす 言
 ひならぶ 言ひ漏らす 忌む 恨む うれふ おきつ 行ふ 仰
 す 思し寄る 思ひ嘆く 思ひ弱る 下る 下ろす 隠す 隠れ
 歩く かしづく かなふ 志し思す 心ゆく 声づくる 定む
 騒ぐ 静まる 忍ぶ 住む 嫉む 立ち煩ふ 奉る 尋ぬ 仕う
 まつる 問ふ 泊る 泣く ならはす 望む 宣はす ののしる
 引き入る 弾きなす まうで来 まかづ 待つ 見す 乱る 迎
 ふ 恵む めで騒ぐ 求む もの思ふ よばふ 読む 寄り来
 喜び思ふ わづらふ わぶ 拜む

万葉

鳴く(24) 音す(6) 鳴き行く(3) 漕ぐ(3) 来ます
 (2) (鳴きて) 越ゆ(2) 騒く(2) (恋しく) あり
 (鳴きて) 去ぬ (鐘) 打つ うら恋す 雲隠る (呼び) 越ゆ
 越え来 離く 過ぐ 騒ぎ行く 響む 鳴き響む 鳴き渡る 揺
 く わび鳴きす

右の語彙から分かるように、源氏は、万葉に比べ、語彙の異なりに
 広がりを見せている。その要因の一つとしては、構文に触れた箇所
 で述べたような、源氏の文脈の豊かさが挙げられる。それは、文脈が量
 的に豊富だと、様々な場面が描かれ、それに応じた様々な行為に対し
 て終止なりが用いられると考えられるからである。

一方、源氏の語彙に比べて、万葉の語彙には偏りが見られる。それ

は「鳴く」「音す」に代表される、直接声や音と関連する語が多いと
 いうことである。

また、源氏の終止なりのように、「判断の対象となる事態」と「根
 拠となる事態」とを有している例も見られる。

11天の河川門に立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き待たむ(二〇

四八)

用例11は、一首前の歌

12天の河川音清けし彦星の秋漕ぐ舟の波のさわきか(二〇四七)

を受けている。波線部「波のさわき」という音を表す表現が用例11の
 終止なりに上接する「わが恋ひし君来ます」という判断の対象となる
 事態の根拠になっている。二つの事態が一首の中に表されている例も
 ある。

13さ夜深けて堀江漕ぐなる松浦船楫の音高し水脈早みかも(一一四

三)

終止なりに上接している「さ夜深けて堀江漕ぐ」が判断の対象となる
 事態で、その判断は「楫の音高し」が根拠となっている。

14汝をと吾を人そ離くなるいで吾君人の中言聞きこすなゆめ(六六

〇)

用例14は、終止なりに上接している事態「汝をと吾を人そ離く」が判
 断の対象となる事態で、波線部「人の中言を聞きこすな」(他人の中
 傷を聞くな)という内容との関連から、他人からの話(音源としては
 人の声)が根拠として想定できる。このような源氏と同じ構造の終止

なりは万葉では前述のように少なく、いずれも終止なりに上接している語が声や音と直接関連していないという特徴が指摘できる。

それが、源氏になると、直接声や音と関連する語が減少する。しかしながら、源氏にも直接声や音と関連する語も少ないながら見られる。その中で「言ふ」などの言語活動に関わる（声に関わる）語が多いが、次の例のように、万葉の用法とは異なる。

15 「容貌などはさてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せて尼になして、わが世の限りは持たらむ」と言ひ散らしたれば、「故少弐の孫は、かたはなむあんなる。あたらしものを。」と言ふなるを、聞くもゆゆしく（玉鬘七二三・一）

用例15の前半は、玉鬘付きの乳母が、筑紫地方の田舎人が玉鬘に近づかない（言い寄らない）ように、わざと玉鬘の容姿を悪く言い触らしている場面である。それを受けて、田舎人が「故少弐の孫は、……」と言っている。この時点で乳母は田舎人に会っていないので、乳母は直接田舎人から「故少弐の孫は、……」という会話を聞いたわけではないことが分かる。しかも田舎人は一人ではないので、全員が同じく「故少弐の孫は、……」という内容を一言一句違えず言っているはずもない。すなわち、乳母は他人から、田舎人が「故少弐の孫は、……」のようなことを言っていると聞いたということである。したがって、その他人からの話が判断の根拠で、終止なりの判断の対象となる事態は「故少弐の孫は、かたはなむあんなる。あたらしものを。」と言ふ」ということになる。このような判断の対象となる事態を有し、そ

の根拠となる事態が想定できる例は、万葉における終止なりに声や音を表す語が上接している例には見られない。

16 「……『よろづの事足らひてめやすき朝臣の、妻をなむ定めざる、はやさるべき人撰りて後見をまうけよ。上達部は、我しあれば、今日明日といふばかりに、なし上げてむ。』とこそ仰せらるなれ。（東屋一八〇二・五）

用例16は、仲人が常陸介に、左近少将のことを帝が『内のようにおっしゃっていると云っている場面である。仲人は、身分的に帝の言葉を直接聞けるはずはなく、『の内容も含めて「仰せらる」まで、仲人が他人から聞いたことを根拠（この場面では聞いたということにして）に判断したことである。用例15、16のように、終止なりの判断の根拠として、それが文上に表されていないとしても、他人から聞いたことが想定できる場合もある。

17 極楽といふなる所には、菩薩なども皆かかることをして、天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ。（手習二〇一七・一〇）

用例17の終止なりが用いられている「極楽といふ所」は、話し手も実際に見たこともなく、他人から聞いた限りの知識に拠る。用例15、16と異なるのは、その他人がより不特定多数であり、その結果、その時の世の中で一般的に言われていることになっているという点である。不特定多数ながらも、想定はできる。

いずれにしても、源氏において、終止なりに声や音に関連する語が上接する場合、他の源氏の終止なりと同じように、「判断の対象となる

事態」と「根拠となる事態」を有する。この点が万葉との大きな違いである。

四 源氏と万葉の相違の解釈

源氏の「終止なり」は、二――一で触れたように、①「音や声などから判断した事態」②「人から聞いた事態」に分けられる。そして、「判断の対象となる事態」と、その「根拠となる事態」を有する。このような構造について、高山善行（二〇〇二）は、

一形式で「状況を根拠とする判断」（状況把握）と「他者から得た情報」（情報把握）の意味を持つところに終止ナリの独自性があり（一七四頁）

と述べている。高山の「情報把握」の「情報」が、上述の「根拠となる事態」に当たり、「状況把握」の「状況」が、「判断の対象となる事態」に当たると思われる。このような構造を有するのは、終止なりが証拠的（evidential）と言われる所以であろう。

しかしながら、万葉の終止なりは構造が異なる。上述の源氏の構造「判断の対象となる事態」「根拠となる事態」に準えて考えてみる。例えば、二――二で挙げた用例4では、「終止なり」の「判断の対象となる事態」は終止なりに上接する事態「鳴く」であり、その「根拠となる事態」も同じく、終止なりに上接する「鳴く」と捉えるしかないであろう。けれども、前述したように、万葉の終止なりは声や音が聞こえているという客観的事実を述べているにすぎない。つまり、源氏の

終止なりは起こっているかいないか不明確な事態に対する一つの判断と言えるが、万葉の終止なりは、それと同じレベルでは判断とは言えない性質の語である。用例5についても同じことが言える。用例6は、「雁来れば萩は散りぬ」が「判断の対象となる事態」とも考えられそうである。すなわち、さ男鹿の「鳴く」声を判断の根拠として、その声が「雁が来ると萩が散ってしまう」と言っていると判断しているということである。しかしながら、前述の源氏の用例2のように、「御先の声遠くなるままに」という根拠から「出で給ふ」という実際には見ていない事態を判断している構造とは性質を異にする。それは、「出で給ふ」は起こりうる事態である。それに対して、「雁来れば萩は散りぬ」は作者の想像（作者にはそう聞こえる）であり、雁が人が話すように、ある特定の内容を伴って鳴くなどということは起こりえないことである。用例7、8についても同様のことが言える。すなわち、用例6、7、8についても、終止なりは、単に声や音が聞こえているということを表しているにすぎない。

源氏の終止なりに類似した意味用法を持つ現代語の助動詞としては、「らしい」「ようだ」が挙げられる。終止なりと「らしい」「ようだ」との関連については、先行研究を参考にしながら、前稿で簡単に触れた。結論としては、基本的には「らしい」に近いが、用例によつては「ようだ」に近い意味用法も見られるというものであった。その際参考にした菊地康人（二〇〇〇）には、次のような記述がある。

観察対象と密着して判断内容（＝様子）が述べられる（と捉えら

れる) 場合はヨウダ、観察^マから距離を置いて(推論を介在させ、あるいはそもそも観察(情報の入手)が伝聞に基づいて行われ、)判断内容を述べる場合はラシイを使う。(五〇頁)

菊地の言う「観察対象」とは用例2で言えば、「御先の声遠くなる」であり、「判断内容」は「出で給ふ」である。「判断内容」が本稿での「判断の対象となる事態」に当たり、「観察対象」が「根拠となる事態」に当たる。「らしい」「ようだ」ともに、二つの事態の間に距離が想定され、その距離の違いが焦点になっている。源氏の終止なりも二つの事態の間に距離が想定でき、その点で「らしい」「ようだ」との共通性を有するが、万葉の終止なりにはその距離が想定できない。前述したように、客観的事実を述べているだけで、判断とは言えないからである。現代語に当てはめるとしたら、やはり「聞こえている」「音がする」などであろう。

それでは、なぜ源氏と万葉とでこのような違いが生じたのであろうか。ここでは、三―一、三―二で述べたように、万葉より源氏の方が文脈が豊かである(量的に豊富である)ということに関連づけて考えてみたい。それは結局、韻文より散文の方が文脈が豊かだということである。もしそうであるなら、万葉と源氏という、時代を異にする資料ではなく、源氏と同時代の韻文でも万葉と同様の傾向が見られるはずである。そこで、「古今和歌集」を対象に、「終止なり」を構文上、語彙上から調査した結果を示す。比較しやすいように、改めて前掲の万葉の結果も示す(古今の場合は、明らかに連体

形に接続している例を除いたものである。)

古今 (全25例)	終止法	19例 (76・0%)
連体法	4例 (16・0%)	
接続法	2例 (8・0%)	
万葉 (全57例)	終止法	36例 (63・2%)
連体法	19例 (33・3%)	
接続法	2例 (3・5%)	

終止法が多いという、前述の万葉の特徴は古今にも同様に見られる。それでは、語彙の面ではどうか。

古今 (全25例)

鳴く (10) 言ふ (6) (露) おく 帰る 聞こゆ
(声) す つくる 衣(に) なる なりまさる (音) まさる よびとよむ

万葉 (全57例)

鳴く (24) 音す (6) 鳴き行く (3) 漕ぐ (3)
来ます (2) (鳴きて) 越ゆ (2) 騒く (2) (恋しく) あり (鳴きて) 去ぬ (鐘) 打つ うら恋す 雲隠る (呼び) 越ゆ 越え来 離く 過ぐ 騒き行く 響む 鳴き響む 鳴き渡る 揺く わび鳴きす

万葉に特徴的だった声や音に直接関連する語「鳴く」「呼びとよむ」「(音)まさる」などがやはり多い。声を表すが、万葉には見られなかつ

た「言ふ」が少なからず見られるのが違いとして指摘できる。この「言ふ」に関しては、前述のように源氏に多く見られるので、時代による語彙の使用の違いを反映したものと考えられる。

18おとは山今朝越え来ればほととぎす梢はるかに今ぞ鳴くなる（一

四二

用例18は、万葉集に多く見られた、「鳴く」が終止なりに上接した例であるが、「今ぞ」という表現からも分かるように、作者がこの歌を詠んでいる、今その時にほととぎすが鳴いている、あるいはその声が聞こえているという内容である。他の、終止なりに「鳴く」「音まさる」といった声や音に直接関連する語が上接している例は同じことが言える。万葉と同じように、「らし」と共起する例も2例見られる。

19ふる雪はかつぞけぬらしあしひきの山のたぎつせ音まさるなり

（三一九）

20そま人は宮木ひくらしあしひきの山の山彦呼びとよむなり（一一

〇一

また、次例のように、推量（推定）の助動詞「べらなり」と共起している例も見られる。

21北へ行く雁ぞ鳴くなる連れて来し数は足らずぞ帰るべらなる（四

一二

前述のように、万葉には見られなかった、「言ふ」が終止なりに上接している例を挙げる。

22みちのくにありと言ふなるなとり川なきな取りては苦しかりけり

（六二八）

この場合の終止なりは三―二で挙げた、源氏の用例17と同じく、世間一般で言われていることを判断の対象としている。その場合は判断の根拠は他人から聞いたことで、その他人は不特定多数ながらも想定できる。このような、世間一般で言われていること、言い伝えの類は、他人から聞いたことだが、その他人の存在が不特定多数なために、他人から聞いたということが一般化されているので、普通、他人の存在は文上に表されない。つまり、判断の対象と判断の根拠を有しながらも、根拠の方は示す必要はなく、文脈に量的な制限のある韻文には適していると言える。終止なりに「言ふ」が上接している他の5例にも同じ構造が見られる。

次に、直接声や音と関わりのない語が、終止なりに上接している例を見てみる。

23皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よ渴きだにせよ（八四七）

この例は、僧正遍昭の歌であるが、次のような詞書がある。

深草の帝の御時に、藏人頭にて夜昼なれつかうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに世にもまじらずして、比延の山に登りて、頭下ろしてけり。そのまたの年、皆人御服脱ぎて、あるはかうぶり賜りなど、よろこびけるを聞きて詠める

つまり、深草の帝が崩御して、作者自身は出家したが、その翌年に諒闇が明けたので、他の人々は喪服を脱いで、人によっては位階が昇進して・・など（＝皆人は花の衣になりぬ）という事を「聞いて」

詠んだということである。すなわち、作者は他の人々が「花の衣になりぬ」ということは、波線部のように「聞いて」知ったのである。したがって、この歌の終止なりは、「皆人は花の衣になりぬ」という「判断の対象となる事態」と、他人から聞いたことという「根拠となる事態」を有している。

24 春来れば雁帰るなり白雲の道行きぶりにことやつてまし (三〇) この歌も、詞書に

雁の^く声^を聞^きて、越にまかりける人を思ひて詠める

とある。波線部のように、作者は雁の声を聞いて（根拠として）、終止なりに上接する「雁帰る」という事態を対象として判断している。

用例24も、用例23と同様、詞書に判断の根拠となる事態が存する。

25 難波なる長柄の橋もつくるなり今は我が身を何にたとへん (一〇

五二)

作者は京にあり、長柄の橋は難波にあるので、終止なりに上接する「つくる」という事態は、作者が実際に見たことではなく、他人から聞いたことであることが分かる。

26 わが上に露ぞ置くなる天の川とわたる舟のかいのしづくか (八六

三)

用例26は、日本古典文学全集（小学館）日本古典文学大系（岩波書店）（各々新編、新も同様）では、万葉集二〇五二番歌「この夕降りくる雨は彦星の早漕ぐ舟のかいのちりかも」との関連に触れている。その歌の「降ってくる雨は舟のかいのちり（しづく）である」という内容

を根拠に、その歌によると「舟のかいのしづくによってわが上に露ぞ置く（自分の体がしめっている）」と判断した可能性もあるが、この歌は、新編日本古典文学全集（小学館）の頭注でも触れているように、状況が分かりにくいので、これ以上の言及は控える。

以上のように、万葉と古今とは、構文、語彙と、単純に比較すると類似した様相を呈しているながらも、構造を細かく見ていくと、古今の終止なりは、源氏の終止なりと似た構造を有している例が万葉より多いことが分かる。また、源氏の終止なりと似た構造の終止なりは、少ないながらも万葉にも見られる。

万葉において、源氏のような二つの事態を有する例は、三一―、三一―で述べたように、少ない。前掲の用例10は長歌であり、短歌よりも判断の根拠となる事態が一つの歌の中に含まれる余地があると言える。用例11はすぐ前の歌中に根拠があり、用例14は人から聞いたことを根拠として判断する例、すなわち、世間一般の評判や噂、言い伝えなどの例である。その場合、他人から聞いたことは、必ずしも文上に明示される必要はない。想定できればいいのである。文脈に制限がある韻文でも使用可能な用法と言えよう。つまり、万葉でも、長歌や、連続する歌まで含めてというように文脈が量的に豊富だったり、用法によっては、源氏の終止なりのような二つの事態を有することができたのである。

前述のように、万葉は、終止なりに声や音といった音源が上接している場合がほとんどと言ってよいが、源氏では、終止なりに音源が上

接しているのではなく、音源は終止なりから離れた所にあつて、それを根拠とした判断の対象となる事態が終止なりに上接しているということになる。その違いは、韻文と散文、すなわち文脈の量的な違いから説明できる。それはどういうことかという、何回も述べたように、源氏の終止なりは「判断の対象となる事態」と「根拠となる事態」が存在する。その二つの事態を表すためには、韻文のように量的に限られた文脈では困難で、豊富な文脈が必要不可欠となる。それで源氏のような、特に量的に文脈が豊富な資料に二つの事態を有する構造の終止なりが用いられやすかったと考えられる。逆に、万葉は文脈が量的に限られているため、源氏のような、二つの事態を有する構造の終止なりを用いるのは困難であつたのだろう。

そして、さらに、前述の古今の終止なりの使用状況を考え合わせるならば、古今は万葉と同じく、文脈は量的に制限されているにもかかわらず、また、万葉よりも終止なりの用例数が少ないにもかかわらず、万葉の終止なりの用例よりも、源氏の終止なりの用例に似た構造の例が多く見られることから、文脈の量的な違いだけではなく、時代的な違いも考慮しなければならないだろう。以上、述べてきたことは、源氏、万葉、古今の三資料のみから言えることとして、可能性として提言したい。

五 付けたり —— いわゆる詠嘆説について ——

終止なりについては、近世以来、その意味用法について諸説が提言

されてきた。その経緯については、高山善行（二〇〇二）に詳しい。おおまかに言う、最終的には詠嘆説と伝聞推定説に収斂され、現在では伝聞推定に落ち着いていると言つてよい状況である。ここでは、詠嘆説について、今まで述べてきたことに関わらせて、筆者の若干の考えを提示する。

詠嘆説については、近世の富士谷成章の記述がよく知られている。

「何なり」これを「末なり」といふ。《有倫》の「なり」は「にあり」の引き合へるにて、受けざまもたがへり。それをば「靡なり」といふ。まがはすべからず。里「ハイ」と言ふ。
（あゆひ抄⁸）

この「里「ハイ」と言ふ」という記述がこの後の詠嘆説へとつながっていく。

源氏の終止なりは、前述のように、「根拠となる事態—判断の対象となる事態」という構造で成り立っていることから、いわゆる証拠性（evidential）の助動詞と言える。「めり」「べし」なども同様であるが、「めり」「べし」に、古来、詠嘆の意味が記されてこなかったのは、それらが終止なりのように、声や音に関連していないからではないか。簡単に言えば、「めり」は従来から言われているように、視覚に関連していると思われるが、視覚は最も基本的な認識の仕方なので、つまり、「見えている」ということは、すべての認識の基本であり、いわば当たり前のことなので、そのことが詠嘆するに値しないとも言えよう。「べし」は、根拠と判断の過程が論理的（理知的、理性的）な推

論を基本とするため、詠嘆のような直接的な感覚とは縁遠いのではないか。

また、源氏の「終止なり」は、根拠が声や音や、他人からの話などの聴覚に関わるもので、それを聞いて（＝伝聞）、未定の事態を対象として判断する（＝推定）という過程を有しているもので、従来の詠嘆、伝聞推定のどちらかと言えば、伝聞推定に近い。これは蛇足であるが、詠嘆説は、前掲の「あゆひ抄」や本居宣長の「古今集遠鏡」を始めとして、和歌を対象にしている場合が多いのではないか。例えば、「古今集遠鏡」では、終止なりが「鳴く」「声す」に上接している場合、すなわち「聞こえている」「声がする」という意味の場合に、「アレ・・・ワ」等の詠嘆で訳されていると言つてよい。一方、伝聞推定説の嚆矢とも言える松尾捨治郎（一九一九）を始め佐伯梅友（一九八八）など、伝聞推定説を唱えているものは、源氏などの散文、あるいは散文によく見られる用法も対象としている傾向があるのではないか。あくまで推測の域を出ないので、今はこれ以上立ち入らないが、詠嘆、伝聞推定、両説は、少なくとも各々の説が提示された初期段階では、各々が対象とした資料の時代や性質が異なっていた可能性もある。

六 おわりに

本稿で述べてきたことの要点をまとめると次のようになる。

I 未定、既定の観点からは、万葉の終止なりは既定、源氏の終止なりは未定と言える。

II 構文、語彙ともに、万葉より源氏の方が多様な様相を呈している。その要因として、源氏の文脈の量的な豊富さが考えられる。

III 万葉と源氏とは終止なりの構造が異なる。万葉の終止なりは、ほとんどが声や音が聞こえているといった客観的事実を表すのに対し、源氏の終止なりは「判断の対象となる事態」と「根拠となる事態」の存する構造を有する。

IV IIIで触れた源氏における「終止なり」の構造を成立させている一つの要因として、IIで触れた源氏の文脈の量的な豊富さが挙げられる。また、源氏と同じ中古の古今の終止なりの意味用法は、源氏と類似している点があり、文脈の量的な違いだけではなく、時代的な違いも考慮する必要がある。

「上代と中古との相違について」と、少々大げさな副題を付けたが、本稿で扱った資料は万葉、源氏、古今のみである。中古でも他の散文、韻文、中世における状況など、本稿で触れられなかった調査、考察の対象は多いが、今後の課題としたい。また、従来、終止なりと対照させて述べられることの多い助動詞として「めり」が挙げられる。現在、その語源についてはともかく、終止なりが聴覚に関わり、「めり」が視覚に関わることについては、大方の支持を得ていると思う。これからは、単にそれだけではなく、本稿で触れたような構造の面からも、その違いを改めて精査、考察していきたい。

註

- (1) 三宅 清 (二〇〇三)
- (2) 塚原は「事実」「非事実」、「確定」「非定」等の範疇で本稿の「未定」「既定」より、より細かく分類している。「既定」「未定」という概念については、北原保雄 (一九九三)、山口佳紀 (一九九八) でも触れられている。
- (3) 夙に松尾捨治郎 (一九六一) で触れられている。最近の論では、山口堯二 (一九九七) にも指摘がある。
- (4) 春日和男 (一九六八) では58例、原田芳起 (一九五五) では「59例ばかり」、竹田純太郎 (一九八六) では60例との記述がある。
- (5) 夙に松尾捨治郎 (一九六一) に指摘がある。また、「日本古典文学大系」(岩波書店)「万葉集」の補注 (三三四～三三五頁) に「これら確實に終止形に接続したナリは、・・・の音(声)ガ聞エルと解して、極めて自然な理解が得られる。これをすべて、音(声)ニヨッテ判断スレバ・・・ラシイという訳によって把握しようとする」と困難に陥る。」という記述がある。
- (6) 山口堯二 (一九九七) 二〇六頁に「この歌は人の噂に言及したものであるが、噂として入手した情報内容に即しての伝聞を表示した例ではない。」という記述がある。山口の言う「情報内容」は本稿の「判断の根拠」に当たると思われる。情報内容に即していないという意味は、根拠が歌中に明示されていないことだと考えられるが、本文でも触れたように、根拠は想定可能である。
- (7) 終止なりについて、近藤泰弘 (二〇〇〇)、高山善行 (二〇〇二) に「証拠的」「証拠性推量」などの記述が見られる。
- (8) 「あゆひ抄新注」(風間書房) 三三五頁に拠る。
- (9) 春日和男 (一九六八) では、終止なりにも触れている箇所でもなく、視覚は人間総べての感覚の中で最も優越したものである。存在の認識や事物の判断など、重要な知覚作用は、実際に見ることに依りて遂げられるものであって、この点、聴覚は確かにより劣等な地位に甘んじなければならぬであらう。(四〇九頁) という言及がある。
- (10) 佐田智明 (一九七四) によると、詠嘆説に近い記述が、中世における和歌の注釈にも見られることが分かる。
- (11) 「本居宣長全集」第三卷(筑摩書房)に拠ると、前掲の用例26「わが上に露ぞ置くなる天の川とわたる舟のかいのしづくか」(八六三)のみ、終止なりに声や音に直接関連する語が上接していないにもかかわらず、詠嘆に訳されている。
- (12) 詠嘆説では、例えば遠藤嘉基 (一九五五)、原田芳起 (一九五五) など、伝聞推定説では、例えば佐伯梅友 (一九八八) などがよく知られている。遠藤嘉基 (一九五五) に、「鑑賞の立場に立つて考えると、伝聞推定説には疑問が出てくる、すなわち、この説は今まで多く散文に用例が求められているようだが、和歌にあてはめてみると、鑑賞に堪えられない。かえって詠嘆の気持ち強い。」という指摘がある。高山善行 (二〇〇二) も「断定詠嘆説」は本来和歌の解釈から帰納されたものである。」(二五九頁) との記述がある。

参考文献

- 遠藤 嘉基（一九五五）『新講和泉式部物語（九）』『国語国文』二四―七
- 春日 和男（一九六八）『存在詞に関する研究』風間書房
- 菊地 康人（二〇〇〇）『「ようだ」と「らしい」―「そうだ」「だろう」との比較も含めて―』『国語学』五一―一
- 北原 保雄（一九九三）『「らむ」留めの歌における既定と推量―原因などを推量する意味はどこから生じるか―』『小松英雄博士退官記念日本語学論集』
- 近藤 泰弘（二〇〇〇）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 佐伯 梅友（一九八八）『古文読解のための文法 下』三省堂
- 佐田 智明（一九七四）『終止形接続のナリについて―その中世・近世における把握―』『語文研究』三七
- 高山 善行（二〇〇二）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房
- 竹田純太郎（一九八六）『「終止ナリ」の考察―上代の用例を中心として―』『国語国文』五五―一二
- 塚原 鉄雄（一九五七）『推量の助動詞―その国語史的考察―』『国語国文』二六―七
- 原田 芳起（一九五五）『伝聞推定の「なり」』『国語国文』二四―七
- 松尾捨治郎（一九一八）『小疑三束』『國學院雜誌』二五―八
- （一九六一）『助動詞の研究』白帝社
- 三宅 清（二〇〇三）『終止形に接続する「なり」の意味用法―未定・既定の観点からの試み―』『初等教育論集』（国士舘大学）
- 山口 堯二（一九九七）『助動詞の伝聞表示に関する通史的考察』『京都語文』二
- 山口 佳紀（一九九八）『古事記歌謡の古語性について』『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』
- 付記
- 他にも参照した著書、論文は多いが、紙幅の関係上、掲載は最小限に止めた。
- また、本文中の用例後の数字は、源氏は『源氏物語大成』の頁数・行数、万葉、古今は歌番号を示す。
- （本学助教授・初等教育）